

「はたらく人の一日を、まっすぐにみつめたい」



——装幀家・矢萩多聞さんが語る『はたらく本屋』と“はたらくシリーズ”的原点

話し手：著者・装幀家 矢萩多聞

聞き手：創元社編集部・山下萌

(2025年10月14日／誠品生活日本橋)

■ 造本装幀コンクール受賞の喜び

(山下) まずは『はたらく本屋』の造本装幀コンクール受賞、率直なお気持ちは？

(矢萩) まさか『はたらく本屋』で賞をいただけるとは思っていませんでした。ぼくはこれまで700冊ほど本をつくりてきましたが、装幀賞をいただくのは実はこれが初めてなんです。受賞の知らせを聞いたのは、ちょうど最新作『はたらく鉄道員』の取材中。写真家の吉田亮人さん、創元社・編集の坂上さん、山下さんと一緒に喜びを分かち合いました。取材現場で知らせをもらえたのが、何より嬉しかったですね。

■ 写真家・吉田亮人さんの出会い

(山下) はたらくシリーズは、文と装幀は矢萩さん、写真を吉田さんで担当されていますが、写真家の吉田亮人さんはどのように出会われたのでしょうか。

(矢萩) 彼とは『偶然の装丁家』という自分の本をつくっているときにお会いしました。吉田さんは国内外で“はたらく人”をテーマに写真を撮っていて、どの作品にも生きる力があふれているんです。この人なら、きっと面白い写真絵本ができると思いました。

2019年、ぼくの出版レーベル Ambooks が瀬戸内アートブックフェアに出展することになり、二人でつくったのがいちばん最初の『はたらく本屋』でした。印刷はリソグラフ、製本の糸綴じも手作業。まさにリトルプレス^{※1}でしたね。

■ 「はたらくシリーズ」のはじまり

(山下) シリーズはどのようにして生まれたのでしょうか。

(矢萩) きっかけは、インドの出版社タラブックスの『Babu the Waiter』という写真絵本でした。食堂ではたらく男性の一日を、モノクロ写真で淡々と追うシンプルな本ですが、暮らしと仕事が一体になった美しさを感じ、ふつうの人の暮らしをまっすぐに写す誠実さに心打たれました。

「日本でも、はたらく人の一日をあるがままに伝える本をつくりたい」——そう思いました。



※1 リトルプレス：個人や書店、グループが自らの手で制作した少部数発行の出版物。

■ 最初のテーマが「本屋」だった理由

(山下) なぜ一巻目が“本屋”だったのでしょうか？

(矢萩) 大阪・阪急水無瀬の「長谷川書店」という町の本屋さんが大好きで、この本をつくるなら、まずはそこを舞台にしたいと決めていました。雑誌の棚の間にリトルプレスがあつたり、拾った石が飾られていたり（笑）。店員の長谷川稔さんとお客様のやり取りを見ているだけで、町と人、本がやわらかくつながって

いるのが分かることです。そんな“町の本屋”的空気をまとめて記録したいと思いました。

(山下) 『はたらく本屋』をつくろうと思ってから「長谷川書店」を選んだのではなく？

(矢萩) はい。「長谷川書店」さんだから、まずは『はたらく本屋』をつくろうとなりました。

■ リソグラフ版から創元社版へ

(山下) すべて手作業でつくられていたんですよね。

(矢萩) そうです。夜中に刷って、ニスをぬって、乾かして、糸で綴じて、ナンバリングのスタンプを押して……。



リソグラフ版の『はたらく』シリーズ

夫婦で糸と針でぬいながら「これはアートか修行か」って笑っていました。そんな頃に、創元社の坂上さんと出会い、彼から「このシリーズをうちで出しませんか」と声をかけてもらつたんです。

そして、オフセット印刷、上製本の創元社版『はたらく』シリーズがスタートしました。

紙の手ざわりから、はたらく人の温度を感じてもらえたうれしいです。他にも表紙のオペークホワイトやカバーの箔押しなど、こまかいところに工夫が詰まっています。

(山下) 書名のロゴデザインもリソグラフ版と創元社版で変えられたんですよね。

(矢萩) はい。創元社版では写真がより目にとまるようにしたかったので、判型も大きくして、書体はフラットに。本文書体が丸ゴシックなのは変わりません。

■ 朗読して伝わる“ことばのリズム”

(山下) 今回のトークイベントでは『はたらく本屋』を朗読されました。

(矢萩) 海外では著者が自分の本を朗読するのがよくあるんです。だからぼくもやってみたくて。声を出して読んでみると、心地よいリズムがある。ぼくも吉田さんも日常的に、子どもに絵本を読み聞かせているので、“声に出て気持ちいい言葉”を意識して選んでいます。 「ぐろんぐろん」「ぱたん」といった、現場の音をうまくつかまえて文章に溶け込ませたいんです。

■ 現場の記録と記憶

■ 紙と印刷にも注目してほしい

(山下) 創元社のオフセット版では印刷や造本にもいろいろと工夫がありますね。

(矢萩) リソグラフ版は“手づくりならではのぬくもり”が魅力でしたが、創元社版では“印刷と造本の美しさ”を考えました。

カバー用紙には竹尾とダイオーペーパープロダクトが共同開発した「サガン GA-FS」、本文には三菱製紙の「MTA+-FS」。本文印刷は特色2色にニス加工。文字はブロンズインキを使用しています。6種類くらいの用紙とインキを試して、真上から見たり斜めから見たりしながら、試行錯誤して今の組み合わせに決まりました。

(山下) 文章は矢萩さんが担当されていますが、取材の後、どのように記憶を文章化しているのですか？

(矢萩) 取材中はメモもしますが、ぼくは記憶を音で思い出すタイプ。機械の音、町のざわめき、風の音——。そういう“音の記憶”から文章がたちあがって、ことばのリズムをつくるんです。宮本常一のようにメモももたず、全部覚えて帰れたら格好いいけど、ぼくは無理（笑）。ICレコーダーをまわしています。時間が経っても、それを聞くと、取材の情景が蘇ります。

■ “休む時間”もはたらく姿

(山下) 写真絵本には、はたらく場面だけでなく休んでいる場面も必ず登場します。

(矢萩) はたらく姿と同じくらい、休む姿にもその人の誠実さが出るんです。『はたらく本屋』では、穂さんがレジ前で黒パンを食べているシーンがあります。日によ



っては玉ネギを味付けなしでレンジで温めてもってくこともある(笑)。そういうところに人柄が垣間見えますよね。

『はたらく中華料理店』では、写真家の吉田さんのご両親が昼寝している場面があります。お母さんから「この写真は恥ずかしい」と言わされたのですが、お願いして掲載をゆるしてもらいました。人間が休む時間にこそ“生きる仕事”的本質が見える気がします。

■ 海外での反響は

(山下) 海外のブックフェアにも出展されたとか。

(矢萩) はい。台北アートブックフェアと、韓国の群山ブックフェアに参加しました。韓国のフェアにあわせて韓国語版もつくったんですが、意外にも「日本語版のほうが外国の本っぽくていい」と言われて(笑)。でもソウルの複数の書店が仕入れてくれたのが嬉しかったです。国をこえてはたらく人の美しさに共感してくれたことを感じました。

今は第2シーズンが始まっています。11月に『はたらく校長先生』『はたらく鉄道員』、2026年2月には『はたらく農家』『はたらく洋菓子店』が刊行予定です。さらに『はたらく博物館』『はたらく製紙工場』の取材も進行中。こちらは2026年5月にでます。「製紙工場」は、このシリーズのカバー用紙をつくるダイオーペーパープロダクトの工場の一日をとりあげます。自分たちの本づくりを支える人たちを描く、原点回帰の一冊になると思います。

■ “はたらくこと”をみつめたい

(矢萩) このシリーズで大切にしているのは、実用書的な職業紹介ではなく「はたらく人の物語」です。資格や収入だけでは測れない、人の暮らしの中にある誠実さや喜び。はたらく人への敬意。それを写真とことばで静かに伝えたい。

はたらくということは、生きることそのものです。“はたらく”という日々の営みの中にある美しさ、他者への優しさをすくいとる本でありたいと思っています。

■ これからの「はたらくシリーズ」

(山下) シリーズは今後どのように展開されるのでしょうか。

(矢萩) 第1シーズン(全6冊)は「本屋」「中華料理店」「製本所」「図書館」「庭師」「動物病院」。